論　説

―大学動物病院の活動の現状とさらなる発展を目指して（Ⅷ）―

大阪府立大学 獣医臨床センターの取組みと課題

嶋田照雅†（大阪府立大学生命環境科学域附属獣医臨床センター長）

1　中百舌鳥からりんくうへそして現在

当センターは，近年世界遺産に登録された百舌鳥・古市古墳群の一つである仁徳天皇陵に近いなかもずキャンパスから，関西国際空港の入り口にあるりんくうキャンパスへ2009年移転した．新たに設置されたセンターは，獣医学舎の一辺の1階から3階までと床面積も広くなり，更新されて充実した医療機器を備え，新たにリニアックを導入した．当時は久保喜平先生がセンター長を務められ，移転に加え大阪の中心地から離れた新たな地域へ移転し，完全予約制の2次診療に変更したことから，症例の確保に苦慮されたとお聞きしている．しかし，関西地域で唯一リニアックを設置した大学附属動物診療施設であることや，現在まで約10年間のセンターの医員やスタッフの尽力もあり，現在では大阪南地域と和歌山を中心として年間約5,000頭（約9割が犬）の症例を受け入れ，年間約2億5千万円程度の収入を得られるようになっている．

当センターの診療科は，移転当初は内科，外科，繁殖科や放射線治療科と各診療科の特定疾患の外来から構成されていたが，現在では，より専門性の高い診療を目指して腫瘍科，軟部組織外科，神経・整形外科，眼科，循環器科，内科及び大動物科から構成されている．また近年では，精度の高い安定した検査結果を得られるように検査科を設置した．検査科は，各検査の専門家を配置した検体検査部門（富士フイルムVETシステムズ㈱へ委託），細胞診・病理検査部門，画像診断部門と血液・細胞管理部門から構成されている．さらに最近では，症例の飼い主と獣医師や看護師などのスタッフとの円滑な関係や環境作りのために，獣医療ソーシャルワーカーを配置した獣医療相談室を設けた．

当センターの構成員は，移転当初，獣医内科学，獣医外科学，獣医繁殖学，獣医放射線学，特殊診断治療学並びに細胞病態学の各研究グループに所属した大学教員，勤務獣医師と動物看護師，受付，事務員，技師からなっていた．その後，久保前センター長と医員の先生方のご尽力により2011年からセンター専任教授，そして現在までにセンター専任の准教授と助教も設けられるようになった．また，昨年から獣医病理学研究グループの教員もセンターの兼任医員として加わった．さらに近年では，学生や研修獣医師の教育やセンターの診療の発展のため，特任臨床助教，特任臨床講師，特任臨床准教授及び特任臨床教授の称号を設け，外部の適任の先生方を称号付与と共に雇用している．当センターの特任臨床教員の身分は，研究者番号の取得と共に科研費などの競争的資金への応募も可能であり，今後大学教員として活躍が期待できる人材の確保にも役立っている．動物看護師についても，看護師長やリーダーなどの称号を設けてセンターの運営に貢献できる人材の確保に努めている．

2　大学合併とこれからの取組み

大阪府立大学は，2022年に大阪市立大学と合併して新大学としての開学を予定している．今年度から両大学の設置法人が統合して「公立大学法人大阪」となり，新法人は新大学を国内外において特色のある魅力的にするための方策を両大学の学域や分野へ求めてきている．獣医学類は，現在新大学設置に向けて欧州認証取得と医学と獣医学の連携の準備を進めている．欧州認証取得の準備における問題は，教育スタッフの数と実習現場の確保である．特に新カリキュラムで単位数が顕著に増える臨床分野では，この問題は深刻である．本学は唯一公立の獣医系大学であることから，国立大学のように他大学と共同して人員や予算を確保することは難しい．当センターは実習の拠点となることから，獣医学類の教員と一緒に法人へ資金などの協力を依頼し，大阪府下や近畿地区の関連機関と連携を模索している．また，当センターでは，上述した特任臨床教員の増員に役立てるため増収の方策を検討している．一方，医学と獣医学の連携につ

† 連絡責任者：嶋田照雅（大阪府立大学生命環境科学域附属獣医臨床センター）
〒598-8531　泉佐野市りんくう往来北1-58　☎・FAX 072-463-5783
E-mail : terumasa@vet.osakafu-u.ac.jp

いては，現在大阪市立大学医学部の関係者と一緒に「One Health」と「Zoobiquity」をキーワードに新たな医学と獣医学の連携の方策について検討している．当センターもトランスレーショナルリサーチなど医学と獣医学が共同に研究できる組織環境を今後考えて行く予定である．

新大学の設置に向けて未定な部分が多く，当センターの今後の取組みについて具体的な記載はできないが，当センターが明るい未来のある働きがいのある近畿地区の動物診療施設の拠点となるように医員やスタッフと共に今後も努力してゆきたいと思う．